



マーシャル方面遺族会  
 (旧クェゼリン方面戦没者遺族会)  
 郵便番号 154  
 世田谷区野沢 3-11-3  
 電話 東京 (421) 3614  
 振替口座東京 93487番  
 編集兼発行人 浮田信家

# 千鳥ヶ淵戦没者墓苑と

## マーシャル方面遺族会

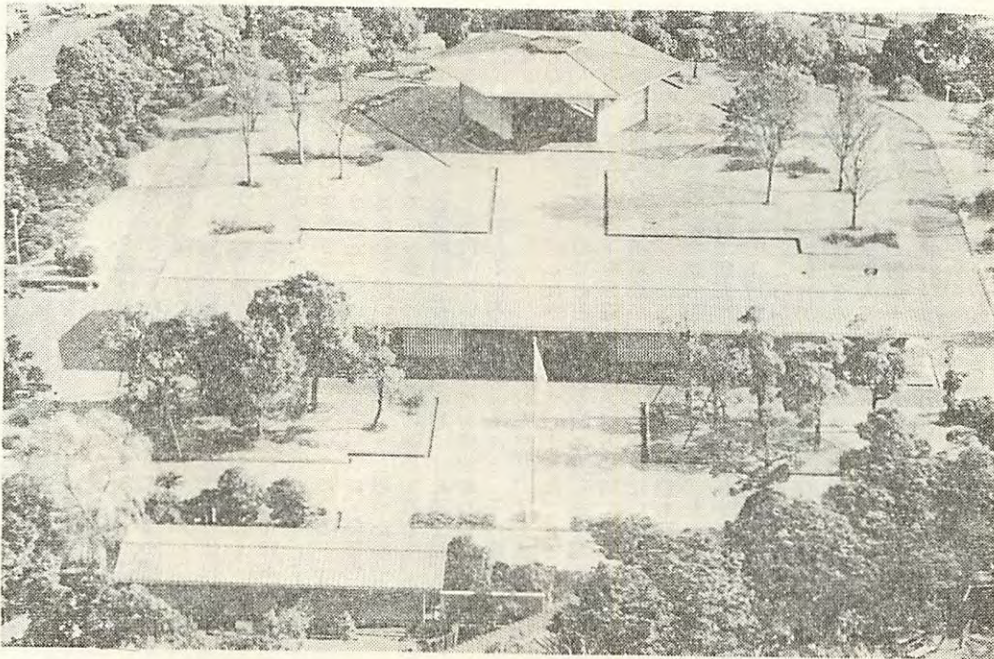
財団法人 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会  
 会長 工藤 昭四郎

昭和二十八年十月全日本無名戦没者合葬建設会(会長は現在貴会々長村上義一殿・当時運輸大臣)を中心に、厚生省・日本遺族会・日本宗教連盟・海外戦没者慰霊委員会相寄り「戦没者の墓を国において建設する」ことについて検討され、全員賛同し、発足してから満二十年がたちました。

以来建設地の選定、墓の名称、各国無名戦士の墓の調査、さては設計、施工等につき、厚生省、合葬建設会のご努力が結実し、昭和三十四年三月二十八日、現在の地において竣工式が行われ、これに、引き続き両陛下の御臨席を仰いで、戦没者の追悼式が行われました。納骨壺に納められた御遺骨は、政府派遣団が収集したもので、戦後海外から帰還した部隊や個人により持ち帰られたもので、軍人・軍属のみならず戦間に参加した一般の人々のもも含まれており、いづれも氏名の判明しないものであります。墓苑建設にご尽力下さった村上会長の下、貴会自ら独力で派遣収集された御遺骨、又昨年政府派遣団が収集して来た遺骨も全部第六室に納まってあります。

今は皇太子、同妃殿下はじめ皇族方のご参拝、各宗教団体はじめ国の内外の人士の参拝を日夜うけておられます。厚生大臣管理下にあるこの国立の墓苑は末永く当会がこれに奉仕し、全国の皆様と共に、永遠の感謝のまことを捧げ、安らかな眠りを続けられるよう祈っておる次第です。

### 千鳥ヶ淵墓苑全景



### 目次

- 千鳥ヶ淵戦没者墓苑と
- マーシャル方面遺族会
- 千鳥ヶ淵墓苑奉仕会
- 会長工藤昭四郎(1)
- 名もなき民のころ
- 皇居勤労奉仕発端の物語
- その二—木下道雄(2)
- マーシャル戦記(その三)
- 木下甫(3)
- ウエーク島について……事務局(4)
- 玉碎二十五年後のタラワ環礁
- (その二)……長谷川 敏(5)
- 環礁ミレー抄(5)……成宮芳三郎(6)
- 沖繩巡拝……佐藤宗丕(7)
- クェゼリンとの友好……佐竹エス(8)
- ルオット島慰霊碑の近影
- マイロン、アイ、ナカタ(9)
- 戦塵抄……大橋新聞(10)
- 大橋部隊を讀める歌
- 哨戒機
- 戦友愛
- 哨戒機対哨戒機の空戦
- 会員だより……事務局(11)
- 戦史叢書のお奨め……事務局(12)
- 昭和四十八年二月六日のご案内(14)
- 援護法による受給者の範囲ひろがる……事務局(14)
- 寄附者芳名……事務局(15)
- 横浜市片山様からの
- 圖書ご寄贈紹介……事務局(15)
- 世界一小さな国から
- 「日本に航空便を」佐竹エス(16)
- 事務局だより……(16)

# 名もなき民のこころ

## 皇居勤勞奉仕発端の物語(その二)

### 木 下 道 雄

聞いているうちに、私達は、肅然、襟を正さざるを得なかつた。厚く一同の厚意を謝するところから、遠路はるばる上京されたのだから、二重橋前もさることながら、皇居の内は、手不足のため、宮殿の焼跡には、いまだに瓦やコンクリートの破片が到るところに山積してゐる。どうか、皇居の内にきて、それを片付けては下さらぬか、と提案したところ、この予期しない言葉に、一同の喜びはたいへんなものであつた。万一を覚悟した検査どころか、全く予期も無い皇居内の作業をたのまれたのだから、一同の喜びはたいへんなもので、その活動ぶりが、連日、実にすさまじいものがあつた。

宮殿の焼跡は上下二段の段地で、なかなか広く、上段が奥宮殿、下段が表宮殿の跡である。六十人の青年たちは、ここを作業場として三日間猛烈に働いてくれた。皇居の附近には泊るところもないので、宿舎は小金井附近であつたと思うが、皇居から二〇キロもはなれてゐるのに、当時、交通機関も充分に復旧しない混雑の中を、毎日そこから通つてきて、朝から夕刻まで、手弁当で働いてくれたのである。

三日の後には、何万個という瓦やコンクリートの破片は宮殿跡の

上段地と下段地との境目にある石垣のところに、実に美事に積み上げられてしまつた。

東北の田舎から遙々上京してきた沢山の青年男女が、皇居内の清掃を手伝つてくれるという事は、既に両陛下のお耳にも達していたが、連日の作業が、いよいよ、今日から始まるという十二月八日の朝、陛下から私に、今日から仕事が始まるなら、その前に一同に会いたい、との御希望があつた。

私も、心ひそかに、それを期待してゐたので、大喜びで、早速使を出して、現場にいる六十人の人たちに、お昼前に、天皇陛下が、作業現場においでになるから、そのつもりでいてもらいたい、ということを通知しておいた。

陛下が作業現場においでになるとき、お供をしたのは僅か数人であつたが、私は御座所から現場まで数百歩の道すがら、焼土の上を歩を進められる陛下のお心のうちを、あれこれと、お後にお供しなから考えた。

れお側にお仕えしている者には、拝察できたことだつたに拘らず、いろいろな事情のために、その実現はできなかったが、奇しくも国破れた今日、陛下は、その機会をつかまれたのだ。

宮殿の焼失などは、いま露ほども惜しいとは思つておいて、夜となく日に相違ない。ただ、夜となく日となく、常にお胸のうちを去らなれないのは、亜細亜大陸の各地、また太平洋の島々に、とりのこされた未復員の将兵その他の同胞の安否や国民各家族のさまざまな悲惨辛苦のことだ。いま数分後にきてくれた青年たちにお会いになれる。こんなことが皇居内で行われることは未だ嘗て前例のないことだが、少しお氣が晴れるだろう、など。

陛下のお姿を遠くから拝した六十人の人たちは仕事をやめてあちこちから集つてきて、陛下をお迎えし、ここに前例のない御対談が始まつたのである。

代表者(慶応義塾出身の鈴木徳一君、惜しくも先年仙台で病歿)が御前に出て御挨拶を申し上げたのに対し、陛下は、遠いところから来てくれて、まことにありがたう。郷里の農作のぐあいは、どんなか、地下足袋は満足に入るか、肥料の配給はどうか、何が一番不自由か、など、御質問は次から次へと、なかなか尽きない。

をお帰りになるべく、二、三十歩おあるきになつたそのとき、突如、列中から湧きおこつたのが、君が代の合唱であつた。

当時、占領軍の取締りがやかましく、殆んど禁句のように思われ、誰も口にすることを遠慮してゐた、その君が代が誰に相談するまでもなく、君のお子から皆の胸の中から、ほとぼり出たのであつた。ところが意外にも、この君が代の歌ごえに、陛下はおん歩みを止めさせられ、じつとこれをきき入つておいでになる。一同は、君が代の合唱裡に、陛下をお見送り申上げようと思つたのであろうが、このお姿を拝して、ご歩行をお止めしては相済みぬ、早く唱い終つてお帰を願ふねば、とあせればあせるほど、その歌声は、とだえがちとなり、はては嗚咽の聲に代つてしまつた。見ると、真黒な手拭を顔に押しあてた面伏しの姿もある。万感胸に迫り、悲しくて悲しくて唱えないのだ。私も悲しかった、誰も彼も悲しかった。しかし、それは、ただの空しい悲しさではない。何かしら云い知れぬ大きな力のこもつた悲しさであつた。今から思えば、この大きな力のこもつたこの悲しさこそ、日本復興の大原動力となつたのではなからうか。

辛うじて唱い終つたとき、陛下は再び歩を進められてお帰りになつたが、私は暫らく後に居残つたところ、青年たちは私に、皇居の草を一把ずついっただいて郷里への土産にしたいという。何のためかと思つて尋ねてみたら、その答は次の通りであつた。

私たちは農民です。草を刈つて、肥料のために堆肥を造ります。この一把の皇居の草を(と)いって、堅く、かたく握りしめて、眼に涙(して)う。いっただいて、持つて帰つて、堆肥の素として、私たちの畑を皇居と直結したいのです。

この青年たちとの御対談に、陛下は何かよほどお感じになつたことが、おありになつたご様子で、お部屋にお帰りになるや、皇后さまに、午後、作業現場にゆかるるよりに、おすすめになり、そのときも、私は再びお供をして現場に参つたが、第二回目からは、両陛下がお揃いで、奉仕の人々二十数年間つづいてゐるのである。

第一回目のとき、皇后さまが陛下に御同行なさらなかつたのは、訳がある。当時、国内の各港には、海外で働いてた同胞の引揚げ船が続々と到着しつづあつたが、殊に南方から帰つてくる人々は、防寒服がなく、みな薄着のまま日本に上陸せねばならぬのがあつた。皇后さまは、これを非常にご心配になり、何か暖かい衣類をとお考えになるのだけれども、店は品切れだし、皇居の内も、宮殿は焼失、倉庫も大部分焼けて材料が乏しい。それでも捜せば、多少の綿や切れ類があるのだから、それをできるだけお集めになり、女官相手に、毛糸でセーター、また綿や切れでチャンチャンコを、できる限り沢山おつくりになるのでお忙がしかつたのである。

陛下は、早急にお供をして、現場に参つたが、第二回目からは、両陛下がお揃いで、奉仕の人々二十数年間つづいてゐるのである。

前例の全くない、皇居内での陛下と地方青年たちとの御対話を、宮内省詰めの新聞記者が見のがす筈はない。ニュースは、すぐに全国に伝えられた。

三日間の感激の奉仕をおえ、おのおの一把の皇居の草を抱きしめて郷里にかえる青年たちの汽車の旅は、上京のときとは全く反対で、まことに朗らかな希望に満ちたものであったに違いない。無断上京のお詫びを兼ね、知事さんに挨拶のため、仙台に途中下車、一同県庁を訪れたところ、折から開会中の県会には、青年隊無事帰着の報に接し、にわかに談事を中止し、知事以下議員総出て一同を喜び迎え、大いにその意気と労とをねぎらったとのことである。

以上語りしるす事柄は、国民対皇室、皇室対国民の間に見られるあらゆる現象のうち、単なる一コマとして、風の如く来り、また風の如く空しく過ぎ去ったのであるうか。

疑いもなく、これは名もなき農民青年男女六十人の渺たる一団である。だが然し、名譽を思わず、利益を求めず、占領軍の弾圧あらばあれ、ただ一片の衷情やみがたく、やまとこころの一筋に立ち上った、この一群れの間にはひらめく正気の光は、決して空しくは消え去らなかつた。

正気は友を呼ぶ。この報、一たび全国に伝わるや、当時、断腸の思いに沈んでいた国民の心の琴線は、俄然、高鳴りをはじめたのである。栗原部からは、第二隊、第三隊、第四隊、第五隊と続々上京してくるし、次ぎには隣りの

郡、また、その次ぎには隣りの郡終には北は北海道、南は九州のほてに至るまで、全国からの奉仕の願ひ出は殺到するばかりで、今日すでにその奉仕の人員は、数十万

# マーシャル戦記

## ウエーク島攻略戦

木ノ下 甫

(終)

12月22日(月) (昭和16年) 日記

「雲のむだ海のはたてに住む我ぞ椰子の木かげに年暮れんとす早い。もう年の暮だ。しかし戦時下の日本にはそれは縁遠い気持だ。今夜こそウエーク上陸決行の日。今度こそ成功を祈るや切風浪心をさわがす。

12月23日(火) 早朝二時頃「〇〇三五、ウエークに上陸、目下激戦中」との報あり。その後「連絡なし」との夕張の電により、夕張の遊退しあるを知る。心安からず。指揮官陣頭に立ちて直接掩護せざれば陸上の苦戦思ふべし。午前10時頃第八戦隊より「飛行機の報によれば〇八一五、ウエーク本島占領、〇九一五、全島降伏せり」との報あり。漸く安心す。直ちに各部に通報。夕張より「一〇三〇、攻略完了」の電あり。この日風浪強く、上陸困難を極めしものと思はる。(二航戦の艦攻2機を失ひ、敵戦闘機2機を撃墜す。22日もこれにてこの日敵機の妨害なし)

二航戦機も、早朝より上陸部隊に達するであろう。官辺より何らの指示勅奨もあるのではない。ただ国民至情の赴くところ、しかあらしめるのである。

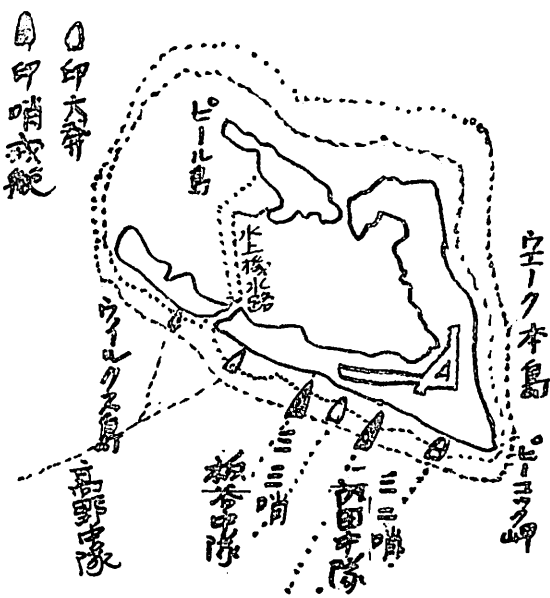
に協力す。十八戦隊(天竜・竜田)はビール島を砲撃すと。

12月24日(水) 六水戦の戦闘概報にて昨夜の上陸至難のため哨戒艇2隻を岸にのし上げて上陸を強行、かくて敵カシニガム中佐以下三百数十名、軍属二千余を捕虜とせしも、わが損害亦大にして内田中隊長始め百余名戦死、重軽傷多数とのことなり。福井の後輩、故内田謹一大尉を悼む心切。かくてこのウエーク攻略には、実に駆逐艦如月、疾風2隻始め中攻4隻、大艇一機、艦攻2機、潜水艦1隻を失ひ、哨戒艇2隻大破し、戦死者五百名を突破す。大なる犠牲なりかかる犠牲を払いて奪取せる島なり。今後確保の任、果然六根に至る。明日大艇にてウエークに飛び、今後の防備計画を立案のこととなる」

さて前回の失敗によって第二次攻略部隊には次の通り増勢されていた。

増援部隊、第八戦隊(利根、筑摩) 第二航空戦隊(蒼谷中隊) 舞二特の一ヶ中隊(板谷中隊)

ウエーク島攻略図



電・飛竜) 第六戦隊(青葉・加古・古鷹・衣笠) 右の増援部隊は、ハワイ空襲の掃蕩から急派されたものであるが、これによって、22日に残存敵戦闘機2機を撃墜し、制空権を確保できた。攻略部隊は21日早朝上陸を命ぜられて西進中であつた。このとき米海軍は空母サラトガを基幹とする部隊が、ウエーク島救援を命ぜられて西進中であつた。つづいて空母レキシントンを中心とした部隊も増援されてウエークに向つていた。

更に空母エンタープライズを中心とする部隊もハワイを出て、西進中であつたから、米海軍が決戦を企画すれば、ウエークを中心と、彼我の空母同志の会戦が起るころであつたが、ハワイ敗戦の

責任で、米太平洋艦隊司令官キーンル大將が更迭され、新任のニミッツ大將未着任のため、臨時長官の不決断から、米空母は皆引返してしまつたので、ウエーク島は孤立無援となつてしまつた。 攻略部隊は二十二日夜の二一七、ウエーク島を発見、指揮官は上陸を指令して、一時漂泊。攻略部隊は、前回沈着して陸戦隊を收容した陸軍艦長畑野少佐の誘導で、接岸隊形をとり、約五千米沖で、大発の卸し方にかかつた。三十二号哨戒艇の大発は、無事卸され、これには堀江小隊長の指揮する決死隊が乗つていた。しかし三十三号艇の大発はうねりのため、なかなか卸せないの上で、指揮官は上陸法丙法で速かに上陸を下令した。これは最後の手段として哨戒艇ぐるみ陸岸にのり上げる非常手

段である。

陸月は三十二号艇を誘導して、陸岸に向い「そのまま直進せよ」と下令した。三十二号艇は〇〇三〇、横倒しとならず美事に海岸に擱坐し、内田中隊長以下の陸隊隊員は、甲板に伏して上陸に備えていたが、忽ち舷側の繩梯子を伝って腰迄つかって海中に入り、陸岸に上陸した。三十三号艇も、二十分位おくれでその西方に接岸し、板谷中隊は無事上陸した。接岸まで気がつかずにいた敵陣は接岸と同時に、猛烈な銃火を浴びせてきたが、特に三十二号艇から上陸した内田中隊の正面、飛行場滑走路の端にあった三吋水平砲一門が、哨戒艇を狙い打ちしたので、哨戒艇は次々に破壊され、火災を起した。艇長以下も艇を捨てて、陸岸に上陸した。

一方金竜丸に乗船した六根派遣の高野中隊は、2隻の大発に乗って、哨戒艇の西側に接岸上陸したが、左端の一隻は水道をへだてたウィルクス島に上陸した。高野中隊長は本島の西端に上陸したので、二分されてしまった。上陸した陸隊はいずれも至近距離に陣取る米軍の猛射でなかなか進めず、三吋砲攻路のため先頭を立てて攻撃中の内田中隊長は、敵弾を顔面に受けて壮烈な戦死をとげ、板谷、高野の両中隊長も負傷し、戦線は膠着してしまった。

一方ただ一隻ウィルクス島に上陸した高野中隊の第三、四小隊と機銃小隊は、西方へ攻撃前進して西端にある敵高角砲台へ突入、占領して、日章旗を掲げたが、我に敵倍する敵兵によって包囲攻撃され、小隊長以下ほとんど戦死し、全滅寸前に追い込まれてしまった。このままでは、上陸部隊は極めて不利な状況となったが、この窮境を一挙に挽回したのが、内田中隊の陽動隊堀江小隊長以下であった。さき大発で一隻本島の右端に上陸した堀江小隊は、滑走路の東端沿ひに北進、ゆくゆく電話線を切断した。これが意外の効果をあげた。前線からの報告が絶えたため指揮官カニンガム中佐は、自動車で前線へ出かけてきた。堀江小隊長は、これを途中で抑え、捕虜としたが、機銃を利かせて中佐を先頭に立てて「ストップ・ファイア」(射撃停止)を叫ばせ乍ら、激戦中の第一線を、次から次と停戦させて行った。

ウィルクス島の我兵は残る者僅かに9名になったが、この停戦命令で全滅寸前に救われた。ウェイク島攻路の成功は、哨戒艇2隻が沈着に擱岸坐礁に成功したことと、堀江小隊長の活躍によるものであった。占領後艦船からの陸隊や医務隊が上陸して、残敵掃蕩と、死傷者の收容手当に当った。この第二次攻路戦における戦死者は一二九名、負傷者は九七七名、計二二四名であった。これに対し米軍の損害は、戦死二二二名、捕虜一六六名であった。

12月25日(木) 日記 「早朝五時、軍医長以下の看護員8名と共に、浜空大艇(田代少佐操縦)にのり〇六〇〇離水。北に飛ぶ。機上にて昼食。一二三〇、ウェイク島上空着。低空を一周す

る。

爆撃の跡しるく、着岸せる哨戒艇2隻、大発2隻、島内寂として、死の静けさを想はず。高野中隊苦戦のウィルクス島、特に感慨深し。礁内に着水。大艇4、水偵4機あり。ゴム浮舟で上陸。棧橋完備せるもP.A.Aホテル全焼し、附近荒廢の跡のみ。赤き鉄骨の二階建多く、屋根あるは二棟のみ。歩して本部に向う。砂ヶ原。水鳥けたたましく空に舞う。群棲せる一角を過ぎて、橋を渡れば、軍艦旗躍ぎて本部あり。田中指揮官に逢う。ゴッタ返したる戦場の跡、仲々整理も大変なり田代少佐等捕虜のパイロットを訊問。夕刻自動車で島内一巡。棧橋にゆき、夕張の水雷艇で水道を通り。夕張へ行

夕、涼しき風に、海鳥の声かしまし。宿舎はベットやわらかく、風寒き位にて心地よし。 12月27日(土) 午前各隊准士官以上を集めて打合せ。今後の方針その他説明。午後どやどやと調査隊来る。十九空司令はじめ二十四航空戦隊の先任参謀外十数名。先任参謀と四艦隊砲術参謀は夕張へ。他は自動車で島内一巡。飛行場では、掩蔽内の戦闘機を見る。弾痕生々しく、座席は血痕多く、最後の日、重傷、掃着せるが如し。掃途ビーコックポイントと砲台を見る。この辺整理未済にて兵器、糧食散乱しあり。 平射砲2門中1門は発火装置なし。夕刻帰る。夜建築関係の訊問

ウェイク島 (Wake Island) のこと

事務局

ウェイク島(ウエーキ島)は、マーンシャル諸島中ラタック列島のポカアック島の北北西方約五百六十キロにある環礁で、北西から南東にかけての長さ約八・三キロ、幅三・七キロ、マーンシャル島からは、この環礁だけが大部離れている。一八九九年一月一七日から米国の領有となり今日に及んでいる。(環礁第四号の表紙参照) ビール島 (Peale Island)、ウェイク島 (Wake Island) をよび、ウィルクス島 (Wilkes Island) の三島からなり、島の総面積は八・五平方キロメートルで、高地はかさ状の樹木や低い木におおわれ環礁の周囲には波浪がある。礁湖内は一般に非常に浅く、最も深い所は北西部にあって水深3-4.6米である。 環礁の周囲は急深で、錯地に適する所はなく、礁湖内は浅すぎて利用できない。環礁の外側は水深が急増するから、船舶はウィルクス島沖の繫船浮標を利用する。 一年を通じて風速5.1-6.6米/秒。強風は年十日位起るが、台風は5年間に一回の記録しかない。気温は夏季には25度乃至35度、冬季には20度乃至30度である雨季は七月-九月間である。

(海上保安庁水路部発行 南洋群島水路誌より)

# 玉碎二十年後の

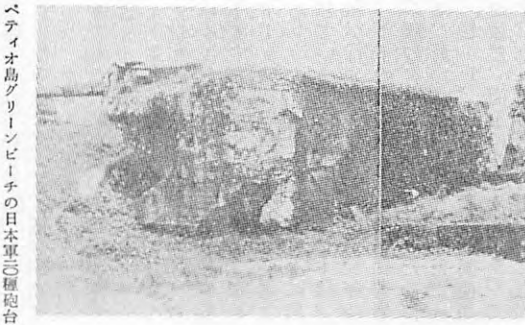
## タラワ環礁——その二——

長谷川 敏

### 三 大砲など兵器の残骸

島の中程より少し東側、内海に面した所に、二連装高角砲が二基残っていました。一ツはやや完全な形を保っていました。他のは砲座がやられていました。何れも辺り一面が雑草で蔽はれ、原住民の子供達の格好の遊び場となっていました。この砲には「呉海軍工廠、四十口径、八九式十二種七高角砲(昭和十五年)」と右書きに刻まれた文字がハッキリと読みとれました。

礁湖側の砲は、この二門だけが残っていました。一方、外海側には、海岸線に沿って、数門の大砲や高角砲などの残骸がありました。そのうちの幾つかの砲は全く原型をとどめない程に破壊されており、特に島の東端にあった二門の大砲の砲身は波打際に転って、海水に洗われていたり、東方の大砲は砲身の先が半分掘ぎとられていたりしていました。また島の西端の大砲はどういうわけか、砲身が礁湖側の方に、少し下向きになっており、またこの砲の弾薬庫は直撃弾を受けたとかで、さしも頭丈なコンクリートに大きな穴があいていました。



ベテオ島グリーンビーチの日本軍三連装砲台

た特に大きな三門の砲身には「SIR W.G. ARMSTRONG & CO. LD. INCH B.L. 1900」と「安式四十五口径八吋砲、日本製鋼所、明治四十四年」との日英双方の刻印が、未だにハッキリと読みとれました。なんとこれら八インチ砲は英国製の物だった訳ですが、同年日本に輸入したものでしょうか。それにしても古いものを使用していたものです。

この他、数人用の小型の鉄製トーチカが三ツと、島の西端には探照灯(電探?)の台らしい物の大破した残骸などがありました。しかし、日本工兵の技術の優秀さを示したというヤシの丸太で作られた地下陣地や防波堤は殆んど跡形もなく整理されていました。僅か外海側に、砂を一ぱいつめたドラム缶とヤシの木で作った塹壕らしきものが一部残ってはいましたが、その辺り帯はぐる草ですっかり蔽はれて、これらの材料は腐っていたり、或は壕の中に新しく仕切りをつけて原住民が豚を飼っていたりしていました。

私はこれを見て、全く20年の歳月というものを感じさせられる思いで胸がつまりました。一方、島の周囲に目を転じますと、外海の方の沖合数百メートルの所に、米軍の上陸を阻止するために、三角すい形に作ったコンクリートの台の上、鉄のL字材を三ツ又二に立てたバリケードが、点と一ノ二軒も一列に並んでいました。当時はこれらの中に鉄条網が張られていたらしいのですが、今はこの台のみが残っています。高さ一米強のこれらの台は、干潮時には全身をあらわしますが、満潮時にはすっかり海水に蔽われてしまいます。

こういっただけから、日本軍は礁湖側よりも外海の方に防備の重点を置いていたと推察されます。しかし米軍は、ヘンリー著の「タラワ」にありますように、遠浅の礁湖側から上陸を強行して来たという事です。いまま潮が引くにつれて、礁湖側から十個を越える米軍の上陸用舟艇や水陸両用車、また米軍の戦車や飛行機などに海草がこびりついた姿があちこちか

ら現われて来ます。四 その他の戦跡

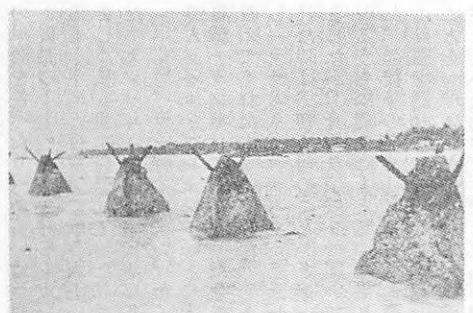
ところで、ベテオ島には、日本軍将兵のも、また米軍のもの墓地は見当りませんでした。ただ米軍将兵の慰霊のための教会(メモリアル、チャーチ)が一ツ、クエゼリン島のそれに比しては、大変粗末なものでありますが、建てられていました。

なお、余談ですが、私達はその後、度々このスクールを訪れ、テニスをしたり、御馳走になった

が建っています。ベテオ島の北、約20軒ほどの所にあるタラワ環礁中の別の島のタボリアという部落に、ミッションスクールがあります。そのニさんの先生達(オーストラリア人)が、日本軍がギルバート諸島を占領したときに布告したという告示文を大事に保存して、置きました。当時ベテオ島にあったミッション・スクールに日本軍が掲示して行った物とのことです。私達は仕事のためこの近くの島に滞在していたとき、この話を聞きまして、早速一時間歩いてスクールへ見せて貰いに行きました。民間人に危害を加えないが、秘密を守るように……という大意の英文が墨で書かれており、最後に一九四一年十二月十日の日付がありました。これは印象に残りました。ニさんの先生の説明によりますと、オーストラリアの博物館などから、この告示文を是非ゆずってほしいと云って来ているが断っているとのことでした。



日本軍占領当時の布告



ベテオ島北岸の海中のバリケード

り、また故障していた映写機を直してあげて、映画を見せてもらったりして、大いに日豪親善(?)に努めました。

五 戦後の島の様子

ベテオ島の西半分に走っていた旧日本軍の飛行機の滑走路は、いまその面影は全くありませんでした。その跡には若いヤシの木々が格子状に整然と植樹されていたり、或はサッカー場と化していたり、また放送所や無電所が建てられていたりして、平和的に使われていました。

ベテオ島の人口は、私達が訪れた当時は四千人ということでした。この原住民の生活は、ギルバート諸島中で最も近代的で、彼等は、ヤシの木の栽培や漁業の他、教師、警官、また英国人の下働きなどをしています。

服装は、男は半ズボンと腰巻き、女はワンピース姿です。それに戦禍のあと、ヤシの葉などで作った家に代って、壁板に白色や青色のペンキが塗られて、サッパリとした木造の家屋が、英国の援助

千島ヶ淵戦没者

墓死のお墓 ①

このお墓は六角堂の中にある陶棺で、その下は六つの地下室になっていて、そこにある二十四個の納骨壺に、各戦場の象徴的遺骨をお納めし、更にその全体を代表する一部のお骨を、ご下賜の金銅のお骨壺に入れて、陶棺にお納めしてあります。

で建てられていました。そしてこれも他の島と違って、電灯が点ぜられ、ラジオが鳴るといふ生活ぶりでした。また島の中ほどの港の近くが島中——というよりギルバート諸島中——で最も賑やかな所でマーケット、映画館、クラブ、テニスコート、子供遊園地などがあります。夜はマニアバというギルドに独特の集会所で、若い男女がレコードに合せてツイストに興じていました。このツイストは、私が行ったときは大流行で、ギルバートの他の島々でも盛んに若者が腰のフリフリをやっていたのは、驚かされ感心もしました。

しかし、彼等の便所は共同使用で依然、海上に突き出たもので、それでも内部は男女別になっており、そこまでは渡り板を歩いて行くようになっていきます。私は初め、これら海上に突き出した小室は何かと思いましたが、それと分つてなる程と思えました。干渉の時は使用を控えなければなりません、潮が満ちて来ますと、大きな木の葉を片手に板を渡って行く姿が遠くからでも目につきま

す。実は日本軍も、これと同じ式の便所を使っていたそうで、米軍は上陸前、航空写真を撮り、この便所の数から、日本軍の兵力を推定、ほぼ適中させていたということです。

私達がベテオ島に来た当初は、原住民達は物珍らしさと戦火の当時に思いついてか、私達を不安気に見ていました。当初、私達の宿舎(戦後、戦跡の整理に来た米軍が建てた小屋を借用し、少しに遊びに来ていた子供達も、

物蔭からヒソヒソと呼び返す親達の声で、ひとりふたりといなくなり、やがて三、四日後にはパッタリひとりも来なくなってしまうました。しかし、同じタラワ環礁でも、直接戦火を受けなかった他の島々では、大変、人なつこく、大人も子供も、鶏、魚、卵、ヤシの実などを持って来てくれたり、更には歓迎パーティーを開いてくれたりしました。

特にマラケイという環礁に滞在していた時には、丁度、イースターになり、クリスマスに次いでという盛大なお祭りがありました。そして、ギルバート特有の面白い歌と踊りの部落対抗のコンクール

が大きなマニアバで三日間に亘って行なわれたのです。私達はこれに客入として招待を受けました。そこで私達は、ギルバートの習慣に従いまして、踊り娘達に、香水とかお粉をプレゼントしたかったのですが、残念にもこういう物は持って来ていませんし、ベテオの唯一のマーケットにでも行かないと売っておけません。仕方なく、それでは男達のためにと、この島の売店で30〜40本のタバコを買って、彼等のお祭りに行きま

した。なお、ギルバートのタバコは普通の巻タバコでなく、タバコの葉を細長い紐のようにひねった長さ20センチ程のもので、使用する時は、それを刃物でこまかく削り、乾燥して薄く剥いだヤシの葉につけて喫うというものです。従って男達は、常にこれら一式を携帯しているわけです。

この催しは、歌と踊りの他に、

各部落対抗のコンクールです。それからそれに対する応援があり、木箱を叩いての若者の声援はさまざまのものです。さすが、屋根だけという広いマニアバも、人々の熱気が暑さの上、彼等の汗と体の臭いが加わって、誠に南洋ならではの雰囲気でしたが、詳しい様子はここでは割愛します。

かくして、私達のギルバートでの前後、約50日間の滞在が終る頃には、あのベテオ島の人も、私達の仕事ぶりなどをラジオで度々耳にしたとかで好意的になり、「コンナマウリ(今日は)」、「コラバ(有難う)」、「ジャカブウ(さよなら)」等々と向うからも声を掛けてくる程となりました。中には、愛想もよくなり、中には、私達がクラブにいますと、日本人と知ってわざわざ寄って来て片言の日本語を披露してくれる人もいます。

「サカナ」、「ヒコキ」、「アブナイド」、「オンナ」などの単語を並べたり、あるいは「見よ東海の……」とか守るも攻むるも……と得意気に歌う人もいます。私も共に合唱しました。また「カンパニ(友達)」、「ビリビリ(早く)」、ヤシ持って来い。たくさんタバコ・プレゼント」と日本語がチャンポンに入り混った歌を教えてくれた人もいました。しかし「マサムネ、マサムネ」と云われた時は、初め何のことかと迷いましたが、身振り手振りで聞いているうちに酒のことと気づきました。

(彼等の多くは私達よりも更に英語を話せません)。日本酒のことをマサムネという固有名詞で呼んでいたわけです。これらを開

いていみると、当時の日本軍の生活の一端がうかがわれるような気がして、ふとなつかしくなりました。なおギルバート語では日本のことを「テン・シャパン」といいます。彼等は外来語の名詞に「テ」という接続を一般につけて用いているのです(例えばラジオはテ・ラジオです)。

赤道直下のギルバート諸島には、春の夜、南十字星と北斗星が、一天に輝きます。その星明り下で、原住民達はカヌーにカンテラをつけて、次々と魚を獲りに沖へ漕ぎ出して行きます。そのカンテラの火々が、静かな波の音のする暗い海面に、ゆらゆらと映じます。それを浜辺から見ていますと、海上のあちこちで、一対づつの明りだけが、音も立てずに右に左にと動き廻ります。その様は誠に静かで美しく、波の音楽入りの平和的な南洋ならではの一幅の絵でありました。

これで私の駄文は終わりますが、何しろ八年前の事ですので、記憶も薄れ、生々しい文章が書けなかつたのが残念です。(終)

環礁ミレー抄 (5)

成宮芳三郎

熱帯の 夜は深々と

もやこめて 沈没船の

見えすなりゆく

◇

砕けたる 砲塔一つ

環礁に 夕かげるとき

高く照るなり

(元第66警備隊・軍医長)

# 沖繩巡拝

佐藤 宗 丕

兼々、沖繩周辺で戦死した曾つての上官、同僚達の霊を弔いたいと念願していたところ、折よく東京都民生局からお誘いを頂きました。

この度の戦争で、東京都は十五万五千人の戦死者を出しましたが、うち沖繩と南方地域で十万人千人が散華されました。

昨年十月、東京都、市区町村、遺族団体が協力して、これ等の英霊を祀る塔を沖繩に建てましたが、今年その塔の前で追悼式を行うというのです。本会は村上会長が建設委員として協力した御縁で呼びかけを頂いたのです。

船で行って海上慰霊をしたかったのですが、日程の関係で空路を選びました。

十月二十七日の東京は曇っていましたが、上空はキレイな青空で、二時間後には沖繩上空に着きました。広く、静かな青い海を見渡して沖繩戦の経緯を想い、波の下の英霊に心からの黙禱を捧げました。

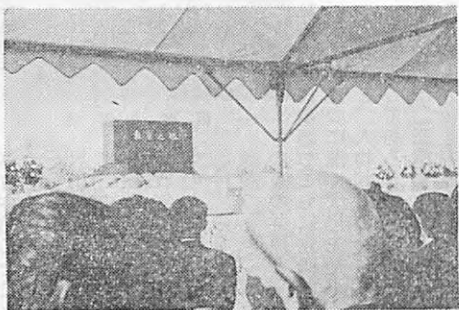
沖繩は今次大戦中最大の激戦地で戦死者は軍人、軍属、住民合せて二〇余万の多きにのぼり、戦後全国の遺族の強い要望によって、各県毎の慰霊塔が立ち並んでいます。

東京は新潟と共に建立が遅れていましたが、南部米須の丘太平洋

を見下す二四〇〇坪の広々とした用地に立派な塔を建てました。南方洋上に向けられた黒御影石に古代文字で「東京之塔」と彫られてあります。

式は国歌吹奏の後、船橋東京都副知事、富田都議会議長、沖繩県関係者、遺族代表等の弔詞、献花と順を追って進められ、参列遺族一四〇名が夫々持参のお花、お菓子、お水、お酒を供え、肉親の英霊に心からの墓参を行いました。

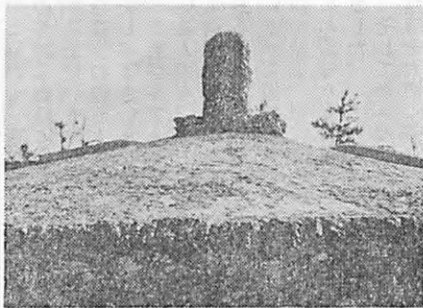
沖繩滞連四日の間、団体行動の中で本会々員の花城カマド様、謝花朝章様、座波ツル様とお嬢さん、大城栄正様と夫人、大城勇様等とお話ができて幸せでした。



東京之塔

戦時中のこと、終戦から今日までの御苦勞やら又ホテルや商店では聞かれないお話の数々を承りました。

大城様は二十年祭にも参加し、



琉魂の塔

いつも本会に格別の御協力を下さっておりますが、この度の私共の巡拝の予定に、海軍慰霊塔がないのを知って、お忙しい中を自動車を出して私を案内し、詳しく御説明下さいました。

沖繩には本会々員が七三名おります。未だ連絡のとれない方はこの何倍もあります。沖繩在住の会員、潜在会員相互の連絡をとることについてお話したところ、大城様は何かやってみますと云はれました。靖国神社においてになれなくても沖繩の護国神社で本会の会員が一緒に慰霊祭をされ、語り合うことができたら、英霊もキッと喜ばれるものと思います。次に滞在中私の巡拝した主なところを記します。

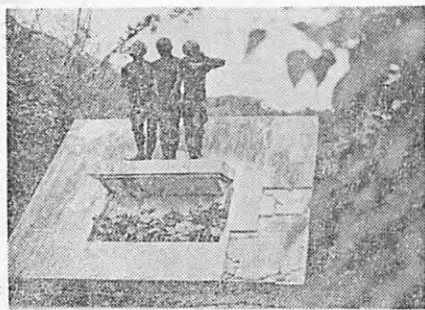
琉魂の塔 南部の米須部落の海

岸に近い地点で最後の抵抗をした軍と住民三万五千柱の英霊が眠っている。戦後附近の住民が遺骨を集めて収め、塔を建てた。

## 弔歌

岩枕 固くもあらん 安らかに眠れとぞ祈る 学びの友は

●健児の塔 沖繩師範学校生徒は米軍上陸直前に召集され、即日鉄血勤皇師範隊を結成、本部、斬込隊、千早隊、野戦築城隊、特別編成中隊を組織して軍の作戦に参加した。初め首里戦線にいたが、追はれて摩文仁の壕に退き、六月十



姫百合の塔

九日敵陣に突入或は自決して終る。その行為誠に壮烈無比。野田校長ほか十七名の職員と生徒二十八名を祀る。

## 弔歌

南の 巖のはてまで 守りきて 散りし竜の児 雲まきのぼる

●黎明の塔 沖繩戦最後の地、摩文仁岳の頂上にある。沖繩派遣第三十二軍司令官牛島満陸軍中将と参謀長長勇陸軍中将の霊を祀る。



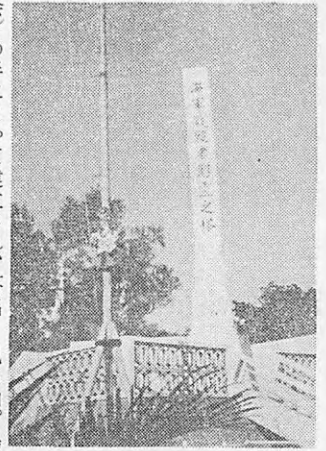
黎明の塔

我が軍は、昭和二十年四月一日米軍沖繩上陸より悪戦苦闘の七五日間、劣勢な装備ながら最後の一兵に至るまでよく戦ったが、戦局好転せず玉砕した。六月二十二日の高地も米軍に占領され、両将軍は洞穴を出て正座割腹して果てた。塔名の染筆は吉田茂元総理大臣である。

## 牛島中将辞世の歌

秋を待たで 枯れ行く島の青草は 皇國の春に よみがえるらん

●海軍戦死者慰霊之塔 昭和三十三年沖繩海友会(元海軍軍人の



海軍慰霊塔

滞在中感じたこと

○沖繩には、まだ沢山の遺骨が埋れている由。海洋博の費用の一部を遺骨収集に廻せないものかしら。

○沖繩の娘さんは縁談のとき、相手の家の戸戸と墓を見る由。島のあちこちに立派な墓が沢山あるのに驚く。祖先を祀るかどうかを、人物判断の物さしにしているのであらうか。

○B5が1〇三機嘉手名基地に来て、全島大騒ぎの最中と思つて行ったが、案に相違して、街は平穩なもの。基地反対、自衛隊反対のビラも数少なく、自衛隊歓迎、自分の国は自分で守ろう、のビラと同数と見た。東京の新聞と現地の実情は相違していた。

○南部の良い所が殆ど米軍の基地になつて居るのは心痛む思いがした。当然街の看板は英語が目立っていた。

○沖繩の海と空は実にキレイであった、美しかった。夫にもまして沖繩の人の心はキレイであった。県立博物館には沖繩人の格調高い文化と民族の優秀さを立証する数々が見られた。

長い間外敵の圧迫と支配下にあって忍従を強いられた乍ら今の沖繩人は立派な魂を持っている。本土の企業が土地買占をしてい

るそうだが、美しい沖繩の自然と、沖繩の人の心を傷つけないよう心して頂きたいものである。

(本会常任理事)

とを」

### クエゼリンとの友好

を続けましょう

佐竹 エス

今年、徳原夫妻にお会い出来ずクエゼリン島のお話を聞くことが出来ないのが淋しく思われま

す。徳原夫人は環礁16号記載のとおり、ハワイ島ホノルルにお引越

しになられたので、日本へはおいでになりませんでした。

マーシャル方面遺族会が現地クエゼリン島その他において、いろ

いろの行事を大成功の中になし遂げさせて下さったのは、徳原夫人の献身的な努力とお力添えがあ

ったからでしょう。御主人始め現地での大勢の方々のご協力も、遺族一人一人の本当の

大切になさって下さっているとも云われている由です。心配した和歌山産の那智黒の小石も大切にされて

いるとのこと、いつまでも、このように大切にして下さるよう祈りたいものです。

遺族会本部から、華々しくはありませんが、現地との連絡はつづ

けております。クエゼリン基地司令官は勿論のこと、慰霊碑建立に

協力下さった方々や、サイパンの政府にお勤めの方、マーシャルの

島々やマキン、タラワ、ナウル、オーション島等で現地派遣のとき

アム、トラック、マジエロ、クエゼリン、ハワイというコースを選んでなどという夢を抱いております。徳原夫人の行かれるところ、マーシャル方面遺族会にご縁があるように思われますので。

クエゼリン島のハワイ二世、マクエゼリン、中田さんからの連絡も続いています。

環礁5号(42年1月号)記載のとおりはじめて41年10月クエゼリン島での日本軍戦死者に対しヒー

レー基地司令官主催の慰霊祭が行れたとき、祭壇の飾り付けや、式次第などにつき指導して下さいました方、

又私達が現地にまいりましたとき42・8・14徳原さんと共にクエゼリン島で、クエゼリンの状況を私達にお話下さった方です。

その後も時折日本へもいらつしやっています。その折は必ずお会いして、現地の様子をお伺いしたり、又お願いしています。

日本に見えたときは私達が東京での観光案内等もいたしておりましたが、現地(マーシャル)でのお世話が、ただいた事からくらべれば申し訳ない位です。

私には仕事があり、休暇はいただきにくい。ため、仕事が終わったあとの時間でおもてなししていただきます。日本での私の立場も了解され、ビジネスは大切になさいとい

われる事に甘えて格別のことはいずれにおきます。それでも浮田さんのお宅や私宅にお招きしたとき

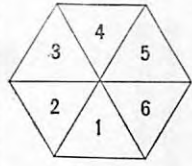
はとても喜んで下さったようです。日本での普通の家庭生活に接することが、立派な豪華なホテルやお料理より楽しいらしいです。

今までこのような友達を日本にも



っていないので、日本に来るとホテル生活そしてキャバレーやナイトクラブにホテルから案内されていたが、これではアメリカにされたのと変らないうつらなざであったようです。ですから東郷神社とか明治神宮、お料理もとうふ料理（東京・鶯谷の笹の雪）等日本人的の雰囲気大変ご満足のご様子でした。やはり明治、大正年代のこのみようです。

私への初めての便りは、タイプ  
の英文でした。私は英語は話せも書けもしませんので、知人に訳していただき、こちらからの便りは代筆して頂きました。その後仮名文字で送ったら、仮名文字の読み書きはできるといことがわかりそれから私宛の手紙はカナ文字です。アメリカ人は文字を書くことは殆んどありません。書類は全部タイプでし、書くのは自分の名前をサインする位です。カナ文字の便りは大変な努力と思われます。私は漢字とカナ文字で漢字には振仮名をつけるという便り



千鳥ヶ淵戦死者  
墓苑のお墓②  
六角堂陶棺の下の六つの地下室の内、私等の肉親太平洋での戦死者は、ソ連地区と共第六室に納められてあります。

なのですが、日本語の勉強になるとのことです。年に一、二回の便りにすぎません。  
クエゼリン島の方達も遺族会に協力して下さいたり、便りもしたいのですが、便りを書くのが、苦が手だとの事です。中田様からは毎年クエゼリンの貝を送って下さいませ。私達がマーシャルの海で貝を集めていた事を知って、クエゼリン島の思い出になるように又戦争中何もないこの島で、海岸のきれいなこの貝を見て、兵隊さん達か、これを家族に送ってあげたいと思っただろうから、その人の代りに送りませうと、便りがあつたり、クエゼリンでは珍らしい毛糸の生地やセーターを見つけたので、あなたのご主人がきつとこんな品々をプレゼントしたいと慰霊碑の中で思っていることでしょうか等と送って下さいませ。  
クエゼリン島は年中暑いので、毛糸のセーターは店で貴重品なのでしよう、それをみつけたので日本では寒い2月6日に着せてあげようとして送られたのださうです。しかし私は、今東京には品物は何でもありますが私ほどなことはよりも慰霊碑のことが一番大事なのだから、品物は送って下さらないように、お気持はとも嬉しいなどという、便りのやりとりです今年もクエゼリン島の貝がとどきました。ご希望の方には2月6日靖国神社参拝のとき用意しておきますので、お受取下さい。沢山はありますので全部の方には渡らないと思ひますが悪からず。貝の御札に、丁度今年八月浮田夫人や安藤さん（遺族会の職員）と三人

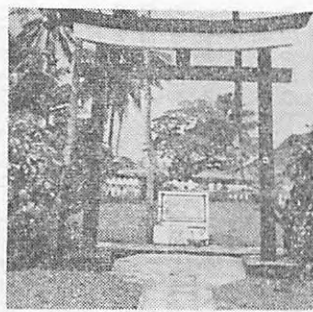
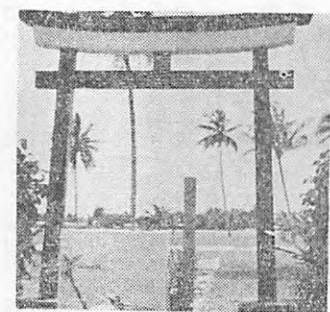
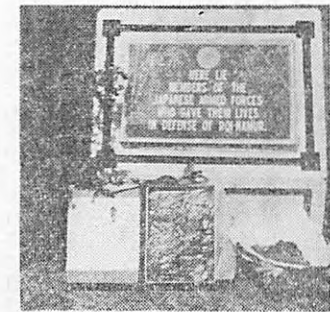
で山陰方面を旅行したときの写真を送りまして、何か日本の品物でご希望の品がありましたら、プレゼントしたいと便りをしました。そのご返事に、今年は忙しくなって日本へ行くことができませんが、懐かしい日本の味、のりのついたあれと大好きな干柿を送ってくださいといつて来ました。あれはすぐ送りましたが、干柿は寒くなつた冬にならないと出来ませんし今はないから正月に送ることとしました。それが丁度秋分の日でしたので、日本では秋のお彼岸の中日であり祖先をうやまいお墓参りをする日なので、あれれ一箱は中田さんへのプレゼント、もう一ツはクエゼリン島の慰霊碑にお供えして下さい。きつと英霊もよるこんで下さいますのでよろしくお願ひします。と書いて送りました。その返事に「クエゼリン島の慰霊碑にお供えします。又ルオット島へも飛行機が予約できたら行つてお供へして来ます。二月六日には全国の遺族の方が、靖国神社参拝後一緒に旅行するため準備をおはじめになっておりますとか、皆さんに代つて、このことを報告しますが、英霊も喜んで皆さんの幸せを守つて下さることと思ひます」とのお便りいただきました。  
又仕事の都合で、時々慰霊碑の前を通りますが、必ずお参りしておりますとも書いてありました。今の私達はクエゼリン島慰霊碑への奉仕は、その島に勤務の方々との文通による理解とお線香その他物心の交際をつづけることが大事であると思ひます。

佐竹 エス様



Mr. Myron I. Nakata

一九七二年（昭47年）10月15日  
日曜私は飛行機の席がとれたので、クエゼリン本島から、ルオット島に墓参にゆき、あなたから贈られたお菓子をお供えて参拝しました。右には大きなシャコ貝が、左には鮮かないるどりの花が咲いていました。周囲はキレイに掃除された。一九六七年あなた達から依頼された木の墓標も建てられました。米軍によって建てられた墓石の表には竹の絵を刻んだ石面に



「ルオット島防備のため自らの生命を捧げた日本の勇士ここに眠る」と彫られておりました。貴会が本島に建てられた慰霊碑とルオットのこの碑は永久にこのまま勇士が眠りつづけることとしよう。夕刻クエゼリンに帰りました。

マイロン・アイ・ナカタ

# 戦塵抄

## 千歳海軍航空隊

千歳は札幌の南、バスで約一時間、現在も千歳空港として使われている所にある。ここにおかれた千歳海軍航空隊は昭和15年11月中旬、基地を木更津に移し、12月為主としてサイパン方面で、16年の2、3月頃は主として、内南洋パラオ方面で、いずれも第四艦隊の行動、訓練に策応した。

6月上旬から8月にかけて、陸攻隊はマーシャル方面(ルオット島)において、戦闘機隊はサイパン方面で、それぞれ基地訓練を実施した。戦闘機隊は6月独自開戦に關連し北辺警備のため、一部は千歳基地に引き返した。陸攻隊は9月を木更津で過し、10月中旬サイパン・トラックを経てマーシャル方面(ルオット島)に進出し、下旬には全機(35機)の進出が完了した。さらに11月末大型上攻撃機一機が増勢された。戦闘機隊も11月までに36機が進出し、これで開戦の日を迎えた。

この戦塵抄はルオット島に駐屯した千歳空、警備隊、航空廠、建築部、軍需部等全島をあげて声援あり、その中最大の後援者であった大橋千歳航空隊司令の姓をつけた大橋新聞(昭和17・8・1創刊)の11月15日までの合併本である。用紙の数の関係上五十部しか発行できなかったものである。奇跡的にお手許にあったものを本会に寄せられたもの、ひとりルオット部

(1) 満天に星いだき 下弦の月もまだ高く 夜のとばりにとざされし

(2) 密雲こむる大空を 何恐れじと勇ましく 或は雲の下を飛び 或は雲の中を飛び 悪気流にもまれつつ あらゆる辛苦と闘いて 任務を果す哨戒機

(3) 見敵必殺これこそは 我等が使命だモットーだ デットカームの海面を 機内一致で見張る 来るなら来て見よ敵艦よ 海の藻屑となす迄は 断じて帰さぬ覚悟なり

(4) 戦友愛 大橋 富士郎 話は少し前の事であるが、新聞が出来たので、美談を紹介したい。4月20日大島島より哨戒に出発せんとし、離陸直後遭難した故加藤少佐機のことである。其の時主操縦者故坂本飛行特務少尉は爆弾の破片中、右手右足に大負傷したまま海中に抛り出された。然し同少尉は極めて沈着且つ氣力旺盛で、火焰漂う海面上に戦友を求めたが、加藤少佐等は見当らず、唯一人伝刀三飛曹の既に意識なく漂流するを発見し、之を骨折せる右腕に抱いた。そうして辛ふじて左手で浮力を保って居たのである。然し遭難乍ら波浪と火焰との為

(5) 哨戒機 浅井 精一 飛曹を腕より奪われるに至った。斯くして故坂本飛行特務少尉と故伝刀三飛曹は別々に救助艇に収容(其の他は当時発見し得ず)せ

られたのであるが、大負傷で自身の浮力を保つに容易でない際、尚骨折した自己の腕に戦友を抱いて飽くまでこれを腕にけんとした戦友愛の美しき感動せざるを得ないではないか。

我等同は大君に一身を捧げた戦友である。故坂本飛行特務少尉を手本として如何なる場合、如何なる事に戦友愛を発揮しようではないか。

五月下旬から六月中旬にかけて我が陸攻隊が〇〇島に進出した時の事である。我哨戒機は毎日の哨戒に時々敵の哨戒機(又飛行艇)と遭遇した。これは我が哨戒機と交叉して居ったものと思われ、この場合我が見張はいつも敵に優つて居て必ず敵を先に発見してた。そうして我が優速を利用して敵に跳り掛るのが例であった。敵は我が一撃に驚いて我を発見する有様で爾後彼は応戦し乍ら右往左往に逃げ惑い遂に雲中に姿を晦ますのを常とし之は彼の得意とするところであった。我攻撃はいつも猛烈であった。

或る日の奥田予備中尉機の如きは、敵の二機を相手とし、陸攻を以て恰も単座戦闘機の如き攻撃振りでありは前上方から或いは後上方又後下方からと連続に襲い掛つた。惜しい哉雲に妨げられて眼前では撃墜するに至らなかつたが、毎回或は片舷發動機を停止せしめ或は長大なる燃料を噴吐せしめ或いは長大なる黒煙りを吐かせる等いつも帰還は困難と認められる大損害を与えた。戦場は味方基

地からも敵基地からも数百哩の遠い哨戒線の先端で行われるのである。それで敵は数回に亘り被害の大きいのに辟易したものの如く、自分の間姿を見せなかつた。ところがその後時々そのかわりに四発の重爆が姿に現わす様になった。多分飛行艇では駄目だということになったものらしい。我が哨戒機はこの重爆にも猛然として襲い掛つた。

然しこの重爆は一層逃げ足が早く遂に撃墜の機会を得る中に陸攻隊は〇〇に引き揚るようになつたのであるが、敵にとっては誠に幸運の至りと言うべきである。元來陸攻は敵の戦闘機を防ぐやうに兵装してあるのだが、何でも敵を見たら攻撃する即我海軍の伝統精神の「見敵必殺主義即ち極度の攻撃精神」が此の空戦にも見事に現われるのであって実に嬉しいではないか。

此の空戦に味方の被害は殆んど無かつたのであるが、この日宮崎一飛曹機は敵機の右舷發動機附近より多量の油を噴出せしめた。且つ右翼附近に多数の命中弾を与え大破口を生ぜしめたが、敵飛行艇の機銃弾一発を自機左舷發動機に受けて遂に停止したため片舷飛行を行わざるを得ざるに至つたのであるが宮崎機は極めて沈着に処置し、空戦の状況を電報しつつ空戦にて低下したる高度を高め、悠々として残りの哨戒任務を遂行し余祐強々として数百哩の長途を片舷飛行にて翔破無事帰還したたのである。被我実力の相違も洵に明らかではないか。

### ◆会員だより◆

役員の皆様へ感謝します

新潟 高林セキ

先日は直会の写真並び写った方々のお名前を明細にお知らせ下さいまして有がとうございました。大変お手数をおかけ致し心から厚く御礼申し上げます。

先年(43年)京都で慰霊祭の折役員の皆様には、大変お世話になりました。

祭典前ひととき、なにかれとお心づかい下さいまして、お茶の接待まで頂き(山浦様から)、11時間の夜行の旅も、何のその、疲れなど吹飛んでしまいました。心なごやかな気持ちで、祭典にのぞみました。いまだに皆様の御心遣身に沁みて楽しい想出となっています。

お名前も存せぬまま、失礼致しておりますので、それこの度、お聞きした次第でございます。本当にありがとうございます。又浮田副会長様には、みたま祭に御参加なさいましたとの由。本会と白菊会の二つだけが、遺族ばかりを会員とする、いはば全員遺族の純粹の遺族会とか、誇り高く感じました。英霊も喜んで心安らかに眠っておられる事と思いません。長く長くつづけて下さい。

京都の想い出と共に想い出の7月30日がやってきました。昭和18年7月30日、猛暑の中を生後8ヶ月の長男を背に、一里の田圃道を、小旗を手に、軍歌を歌って夫を駅まで送ったあの日、あの時あの顔が、つい昨日の事の様に、

頭の中に蘇ってきます。私達遺族がこうしてやさしく話し合い、助け合い共に力を合せ明るい住みよ、幸せな国にするよう努力することが、お国の為には華された英霊に対する務めではないでしょうか。

又環礁を通じ、私共仲良く、日々を過せるのも、やはり遺族である会長はじめ本部役員の方々の御苦心のお蔭と感謝いたして居ります。終りに益々会が発展することと酷暑の折皆様の御健康をお祈り致して筆をおきます。

○政府の遺骨収束団ありがとう  
香川 上村忠太郎

この度はまた環礁のご送付色々のご連絡を頂き誠に有難うございます。深く感謝いたしております。現地の様子、遺骨収束団の御苦勞目の前に浮んで参り、戦争そのものか思い出されて参ります。本部皆様のご苦勞により、さぞかし戦死の神々もよろこんでおられることと存じます。

(47・7・24受)  
○六通写真に我子を見出して  
熊本 山部 貢

先程は第六通信隊の写真お送り頂き有難うございました。戦死致しました長男満の面影もありありと見えました。本日に御親切の段お言葉もありませぬ。

(47・8・14受)  
○明年の直会旅行参加のみます  
浦手 ニル

二月六日の慰霊祭は、古い会員の方のみ参加されて、行なはれると思っていました。環礁十六号を読みまして、明年のことは、今

から申込んでいないと、参加させていたげないとのこと、明年の二月六日慰霊祭、直会旅行には是非参加させて下さいませよう願っています。外の遺族の皆様とお逢いしたいと思つてます。

戦死した夫の母は、八月三日に永眠いたしました。主人は一人っ子だったので杖とも柱ともたよりにしていた大切な子であつただけに、戦死のしらせをうけたときの両親のかなしみは、筆にて書きあらはすことが出来ないほどでした。父は広島島の原爆で亡くなり、母は私をたよりにしておられました。孫二人も、この祖母によくしてくれましたので、喜んでいましがたが八十一才で亡くなりました。今までは年寄りがいましたので、宿泊の旅は出来ませんでした。来年は亡き両親の分も、共に慰霊祭にお詣りさせていただきます。

(47・8・14受)  
○六通写真をお送り下さい  
松尾一機曹の父松尾 梅次

私の長男は去る十六年二月に、佐世保軍港より、横須賀海兵団に転勤して、始めてマーシャル群島方面第六通信隊勤務で船出したと思ひます。毎日夜毎に当時を想起して居ります折柄、七月一日附環礁を御送付頂き誠に有り難く、御礼申し上げます。

第一頁に玉碎三ヶ月前海軍第六通信隊の半枚員の記念写真が出ておりまして、突になつかしく想っている者でございます。

今少しはつきりした写真で遠い昔の小供の顔を見たいしたく、A、B組の物をお手数乍ら、お送り願えれば幸甚と存じますので、

よろしくお願い申し上げます。(47・7・10受)  
○私も会員に加えて下さい  
大阪守口市 吉原 初

突然で失礼致します。昨日守口市堀町に居られる河村美津様のお話でマーシャル方面遺族会があると聞きまして、永い間少しも知りませんでした。永い間少しも知りませんでした。軍風で戦死を致しまして、今まで何所へ相談をすればよろしいか判りませんし、心の底に暗い蔭を取り払う事が出来ませんでした。このお話を聞きまして、光がさした様な気が致しました。何卒私も皆様と一緒にマーシャル方面遺族会の一員として、お加え下さる様何かと御世話な事は存じますが良しくお願ひ申し上げます。死亡通知によれば、主人は第十一海軍航空隊軍風只木部隊とあり、当時の生存者十一名帰還と有りまして、もしやその中に只木部隊に居られた方がわかりませんか。又今まで発行されませんでした本などが残って居りませんか。もしありましたら、面倒でも是非送って下さいませ。○靖国神社権宮司さんからはじめ

て本会のことを知りました。9月11日靖国神社の池田権宮司様から、本会に電話で「時折神社にお参りにお見え下さる大高ふさ江様という方と、その方のご長男大高時男様という方がある。お二人共ご熱心な方であるが、御主人は太平洋戦争中クエゼリン島で戦死されたというので、貴会のことをお話したら是非紹介を願いたい」とのことである。時男殿は現在警視庁の警備第一課長としてご活

躍、ふさ江様は彦根市にお住いである、よろしく連絡たのむ」とのことでありませぬ。早速警視庁に電話のところ不在、その後御連絡があり大変お喜び下さり、母堂ふさ江様上京の折は遺族会においでになる由ご依頼がありました。

### 事務局より

守口市の吉原初様にもまたこの大高ふさ江様も、昭和38年発会のお知らせをお送りしたのですが戦死公報をお送りしたときの御住所と違っていたためお受取りいただけませんでした。本会の関係する三万余の御遺族の中このような方がまだ多数あるように思われます。お氣付の方がありましたら、お教えいたゞいて、一人でも二人でもお喜こびりいただきたいと思います。

○少しでも南へ行きたい  
長野 伊藤ますの

出来れば夫の亡くなったクエゼリンに行きたい。そのことで何年も一生懸命働いてきました。冬はゴルフ場が雪のため休業になりますのでやっと一週間香港に行つてきました。

二月一日  
雲海の 上より台湾 見えしとき  
老の身安堵の 胸なでおろす

二月二日  
香港は 色鮮かに 飾られ居て  
夢の国只驚き 我を忘るる

二月四日  
夫の命日 向ふに近し 台湾より  
香爐買いて 我は供えぬ

二月五日  
マーシャルに散りし夫を 三十年  
偲び続けて 吾子育て来ぬ

# 戦史叢書のお奨め

## 1 中部太平洋陸軍作戦—マリアナ玉砕まで—

太平洋の防波堤崩壊—第三十一軍十数万人に及ぶ大兵が「我身をもつて太平洋の防波堤たらん」として玉砕した悲劇の運命

## 2 中部太平洋方面海軍作戦①—昭和十七年五月まで—

グアム島の攻略とウエークの苦戦—開戦までの南洋の地誌等を序編とし、次いで主として第一段作戦、第二段作戦の初動に及ぶ

## 3 中部太平洋方面海軍作戦②—昭和十七年六月以降

ガ島撤退、山本長官戦死—時運は我に味方せず、中部太平洋の島島は玉砕に玉砕を重ね、残る島々も餓死寸前で終戦の玉音を聞く

## 「環礁」編集にあたって、記事

の正確を期するため、図書館や書店をあちこち漁りましたが、結局防衛庁戦史室著の「戦史叢書」の右に出るものがないことが判りました。それ故私は、個人で予約し、昭和41年8月の第一回配本から毎号購読して、本年(47年)10月59回目の配本「大本営陸軍部(4)」を受けました。私は戦艦金剛で太平洋戦争に参加しましたので毎号ながしかり人事ならぬ想い出があり、そしてその正確さに、驚いております。全部で九十一冊のこと、あとの30余冊を楽しみにしています。私など書評を書く能力はありませんが発行所朝雲新聞社の取締役編集局長大倉清次殿の御了解を得て、各界権威の方々から寄せられた書評を転載し皆様に本書を推薦いたします。

## ○共通の遺産—池島 信平

(文芸春秋・社長)

あるアメリカの戦史研究家が、太平洋戦争とは今や日本とアメリカにとって、共通の遺産であり、その中からお互いに学ぶべき

## ものが多くと書いていた。

私はこれは大変おもしろい言葉だと思ふ。とにかくあれだけの犠牲を払った太平洋戦争というものが、われわれがいろいろと学ぶべきものはあるし、またそれを正確に知識として持たなければならぬ。

そういう意味で私は今度の防衛庁戦史室でやられる戦史叢書に非常に期待している。もちろん編集に絶体必要な客観性というものは当然尊重されるであろうし、それになんといつても今まで一番太平洋戦争の史料を沢山持ち、それを専門に研究しておられる方が担当しているのだから、そういう方々の歴史的な良識というものを信頼して、私はこの本が早くわれわれの机辺に現われることを待っているわけである。

## ○敗戦の記録も正確に—

山岡 莊八(作家)

大東亜戦争はかってない広範な戦域と膨大な物資、兵力の戦いであり、これらのすべてを正確に伝えるようにすることは容易ならぬ大

正確な事実を記録した戦史を、殉国者の御霊前に供えこれを子孫に伝えることは如何でしょう

## 事業であろう、殊に、日本においては、敗戦という悲惨な結末に終っているだけに困難は大きい。

戦史は往々にして勝利の記録のみが脚光を浴びがちであるが、今度出る戦史叢書は勝利の記録はもちろんのこと、敗戦の記録も記録として正確な史料をもとに叙述されるという。戦争末期、陸に海に空に名もなく散っていった幾多の人々の記録がこうして世に出るといふことは、それらの人達のためにも、また現代に生きるわれわれにとつても意義深いことである。

## ○期待される成果 中村 菊男

(慶応大学教授)

久しく待たれて戦史室の「大東亜戦争陸・海軍戦史」がいよいよ刊行のはこびになった。これまで大東亜戦争史に関する著作は数多くてだが、戦史室での研究はようやく、長年月をかけて組織的に資料をあつめ、関係者が十分検討した上で発表されるものは他に類例がない。われわれにとって、この上ないよるこびであるとともに、内外の現代史学界にあたえた影響は

## ○後世に貴重な教訓を

美土路 一 (朝日新聞社社長)

四年間におよんだ太平洋戦争は、日本および日本人に対してだけでなく、全世界の秩序をも根底から変革する程の大きな影響をもたらしましたが、あの大戦の後、苦境の底から雄々しく立ち上った日本は、二十年にして今日見られるような姿にまで生まれ変わったのであります。私共は、この大きな事実を単に過去の出来事として看過するのではなく、日本民族が今後さらに発展するための貴重な教訓として身に体し、かつ次の世代にこれを引き継いで躍進の礎石となさなければなりません。その意味におきまして、今後権威ある防衛庁戦史室が十五年の歳月をかけて調べあげて来た資料を基に戦史を公刊されることは、正確な記録を後世に伝えるというだけでなく、その中から後世に多くの教訓を残すという意味においても極めて意義深い事と思ひます。一人でも多くの人が、本書を読まれることをお薦めします。

## ◎週間読売

旧軍人を含めた四十人の戦史室員が、十年余の歳月をかけて調査してきた太平洋戦史。まず、日本側編集の決定版ともいえよう。資料をもとにして、事実だけをつづり、批判はつとめて避けているようだ。

## ◎週間サンケイ

「十年計画の戦史出版」という雄大な構想が出てきている。防衛庁の機関紙を発行している朝雲新聞社の戦史叢書がそれだ。昭和五十年までに全九十一巻の第二次世界大戦史を刊行するという。

## ◎サンデー毎日

おそきに失した「戦史叢書」前略……さて、このように第二次大戦に関する記録がぞくぞくと出される意味について述べようと思つたが、すでに余白がなくなつた。その意味でむしろおそきに失したと思われるのは防衛庁戦史室著「戦史叢書」の発刊だろう。日本で、戦争に関するノンフィクション(歴史)が現れない理由のひとつとして、公刊戦史のなかつたことがあげられないこともない。

## —各巻内容—

- 中部 陸軍作戦
- 太平洋 —マリアナ玉砕まで—

第一編 進攻 作戰

第一章 開戦前の状況

一 兵要地誌の概観

・ 南洋諸島の沿革

・ 地誌

・ 領域、戸口、気象衛生、行政、司法、産業

第二章 日米の太平洋方面戦略

一 グラム島攻略陸海協同作戰

二 連合軍基地の覆滅作戰

・ ギルバート諸島方面作戰

・ ウエック島の攻略

三 開戦当初の米軍の太平洋方面作戰指導

四 今後の作戰指導方針の決定

五 ミッドウエー作戰

第二章 連合軍の反攻開始と中部太平洋の戦備強化

一 連合軍の反攻開始と第一

次陸軍部隊の派遣

二 南東方面に対する連合軍の反攻開始

三 外郭要域防衛強化思想の萌芽

・ 米海兵隊のマキン島奇襲

・ マキン島に対する米軍の奇襲上陸

・ 海軍のマインシャル、ギルバート方面防備強化

・ ナウル、オーション、ギルバートの占領、特別陸戦隊の中部太平洋方面進出、米巡洋艦のタラワ島

攻撃

・ 中部太平洋への最初の陸軍部隊派遣

五 中部太平洋方面の戦備強化

・ 離島防衛戦略思想の転換

・ 海軍のギルバート方面防備強化

・ 中部太平洋への陸軍兵力の本格的派遣

・ ギルバート、ウエック

南島守備隊新設決定

・ 南海第一、第二守備隊の派遣

・ アッツ島の玉砕

・ 南海第三守備隊の編成と南海第四守備隊の出発

第二章 絶対国防圏の新作戦方針決定と中部太平洋の戦備強化

一 南東方面連合軍の進攻再開

・ 南東方面の作戰指導

・ 南海第四守備隊の南東転用と歩兵第127聯隊のマインシャル諸島派遣

三 新作戦方針の決定絶対国防圏の設定

四 第五十二師団の動員と甲支隊の派遣

・ 中南部太平洋方面の連合軍の反撃強化

・ 昭和18年9月末ごろの中部太平洋方面の戦況

・ 機動部隊の南島、ギルバート来襲

・ 第五十二師団の動員と甲支隊の派遣

第三章 国防圏前衛線の作戰と第三十一軍の新設

一 米軍の太平洋方面作戰計画の概要

・ 対日反攻構想の成長

・ 一九四三年(昭和18)年以降の太平洋戦略方針の決定

・ 中部太平洋方面作戰計画

二 ギルバート諸島の玉砕

・ 作戰前の一般状況

・ 米軍来攻前の中部太平洋方面の防備状況

・ ギルバート諸島方面の防備

・ ギルバート諸島の玉砕

・ 米機動部隊の上陸準備砲撃

・ 米軍タラワ、マキンに上陸開始

・ ギルバート増援作戰準備

・ マキン、タラワの玉砕増援部隊のクサイ、ミレ島への転進

・ ギルバート沖航空戦

・ 作戰の終結

三 ギルバート失陥後の情勢判断

・ マインシャル方面の空襲激化

・ 第三師団、第十三師団の太平洋方面への転用中止

四 陸軍諸部隊の中部太平洋への展開

・ 第五十二師団のトラック島進出

・ 南洋第二支隊クサイ島進出

・ 南洋第三支隊ボナベ島進出

・ 海上機動第一旅団のマインシャル諸島進出

五 マインシャル諸島の失陥

・ 作戰前の一般状況

・ 地誌

・ マインシャル諸島の戦略的価値

・ 開戦後のマインシャル諸島の防備

・ 米軍のマインシャル諸島攻略決定と計画

・ 目標の決定

・ マインシャル諸島攻略作戰部隊の編成

・ 米軍のクゼリン環礁来攻と聯合艦隊の作戰指導

・ ルオット島の玉砕

・ ルオット島の防備

・ 米軍の上陸準備

・ ルオット島の玉砕

・ クゼリン島の玉砕

・ 日本の兵力、配備

・ 米軍上陸前の砲撃

・ 米軍の上陸

・ 日本軍の玉砕

・ エビゼ島など小離島の戦

・ 作戰の終末

・ 米軍のマジュロ環礁占領

・ 作戰終結後のマインシャル方面の状況

中部 方面海軍作戰①

一 昭和十七年五月まで

一編 開戦までの中部太平洋

ここに地誌、原住民、産業、南洋群島の歴史、南洋委任統治の沿革、ついで日米両国の太平洋進出と軍備制限問題として開戦までの南洋群島の軍事施設の経過が、詳記されてある。

二編 開戦から17・4・9までのいわゆる第一段作戰で、ウエック、グラム島の占領、タラワ、マキン等ギルバート諸島の攻略、占領、ナウル、オーション両島の爆撃等書かれてある。

三編 第二段作戰(17・4・10から)のことであるが、その中の第一章にナウル、オーション攻略作戰の延期(17・5・19)までのことが記載されている。

毎号多数の付図表が添付されているが本巻にはサイパン附近・パラオ諸島附近・トラック環礁・クゼリン環礁・ウォッゼ環礁・マ

ロニラップ環礁・ヤルト環礁・マジュロ環礁・ミレ環礁・ナウル島・オーション島の概図が添付されている。

中部 方面海軍作戰②

一 昭和十七年六月以降

本年(昭和四十八年)一月末発行予定である。特に本会に関係の深いギルバート、マインシャルの島々も、玉砕に玉砕を重ね、残った島々も餓死寸前の状態で終戦を迎えた悪戦苦闘の記録の詳細である。

購読方法

○戦史叢書の体裁

A5判・布クロス本装頓・ビニールカバー付・ケイス入各巻別冊付表付図つき。約七百頁。送料一七〇円

○戦史叢書の定価

1 中 部 陸 軍 作 戦 (1) 二二〇〇円

2 中 部 平 面 海 軍 作 戦 (1) 二九〇〇円

3 中 部 太 平 洋 方 面 海 軍 作 戦 (2) 三二〇〇円

1・2は初版の定価です。

○ご希望の方は

同封したはがきその他で、本会事務局にお申込み下さい。注文冊数によって、割引もあります。なお二版以後は値上げとなる由、ご希望の方はこの際お申込みになるのがよろしいと思

います。(浮田)

# 昭和四十八年二月六日(火)

## 慰霊祭・総会 直会旅行会の御案内

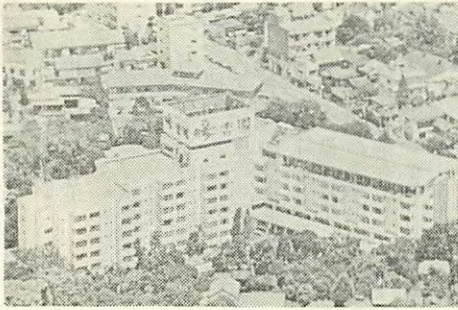
### 一、慰霊祭と総会

午前九時 受付を始めます。  
いつもの通り清国神社参集所にお集り下さい。  
午前十時 昇殿参拝  
英霊に御対面の後、九段坂下の九段会館にお移り頂きます。  
午前十一時 総会  
九段会館大食堂で行います。  
総会の後一緒に中食をとり乍ら懇談し

### 午後一時 解散

(中食は全員分用意致しますので不要の方はその旨を出席通知ハガキに御書添下さい)

### 二、九段会館に宿泊希望の方は、



宿泊日、男女別、氏名を書いて一月十日迄に料金添えお申込下さい。  
宿泊料金は一泊二食付お一人分二、〇〇〇円です。

### 三、直会(なほらい)旅行会

四十五年は伊豆修善寺温泉、四十六年は三浦半島城ヶ島、四十七年は房州太海と三回の直会旅行を催して、参加した皆様から大層喜ばれておりますが、今年も暖かい伊豆の伊東を選びました。御家族御一緒に御参加下さい。

### 時 二月六日(火)・七日(水)

所 伊東温泉 ホテル暖香園  
静岡県伊東市玖須美一五八  
電話〇五五七―三七―〇〇一  
参加費 一人 六、五〇〇円  
宿泊料 往復バス代、入場料、七日の中食料とも。(バス代の値上が予想されますので六、五〇〇円お預りし残金があれば帰りの車中で払戻し致します)

申込 一月十日迄に料金添え氏名男女別、年令をはっきり書いてお申込下さい。一座席を使うお子様は人数に入れて下さい。毎年締切日以後沢山の希望者があってお断りいたします。申込順に定員(六十名)になった時、又は一月十日で締切りです。お早目にお申込み下さい。尤も、バスに乗らないでホ

テル直行の方は部屋があればお受けします。  
日程二月六日(火)午後一時、九段会館を出発して一路伊東温泉に向い、入浴の後例年通りの楽しい一時を過します  
(バスに弱い方は電車でホテルに直行して頂きます)  
二月七日(水)伊東出発、熱海駅、梅園、十国峠、箱根開所跡箱根神社、大涌谷、自然科学館を経て途中中食をして、小田原駅前、横浜駅前、東京駅前を経て、午後五時、九段会館に帰着の予定です。

○主な見どころ 伊東温泉は伊豆半島の東海岸にあって夏涼しく冬暖かな保養地。三月始めには大島桜が咲く。温泉は食塩水で、三〇―三五度、一日湧出量二六万石という。曾我兄弟の祖父で、伊東領主の伊東祐親の遺跡や、木下幸太郎の碑、尾上柴舟の歌碑、イギリス人ブランデンの詩碑もある。熱海梅園は天候次第でキレイな梅が見られる筈。

箱根開所は、諸国大名の謀叛、入鉄砲(江戸への兵器の搬入)、出女(大名の妻を人質として江戸に居住させて帰国を封じていたので)を取締った所。附近の旧街道の杉並木は見るだけでなく歩くのもよい。

箱根神社は山の中腹にある。杉の古木に囲まれた社殿は流石東海道一と云われたたずまい。奈良時代からの由緒ある神社で武家の信仰が厚かった。

大涌谷は箱根の最高峰神山(一四九三米)の爆発火口で昔箱根全山が火山であった名残り。町立自

然科学館には箱根の凡てが一目でわかる施設がある。地の底から吹き上げる硫黄で附近に草も木もない様はすさまじい。長生きしたい

## 対象者の範囲ひろがる

戦傷病者戦歿者遺族等援護法などにより援護を受けられる方の範囲が10月1日から次のようにひろがりました。(ただし以下の⑦、⑧は5月29日にさかのぼって実施されます)

### ▼新たな対象者と援護の種類

①次の(ア)～(エ)に該当する特別項症から第五款症までの障害のある方に対しては、障害年金(ア)日華事変中に、本邦、樺太、千島列島、朝鮮、台湾で公務により傷病にかかった旧陸海軍部内の有給軍属、(イ)日華事変中に満州で軍関係業務により傷病にかかった旧満鉄などの職員(ウ)昭和14年12月22日から同16年12月7日までの間に軍関係業務により傷病にかかった旧満州開拓青年義勇隊員、(エ)日華事変中に勤務に関連した傷病にかかった旧軍人、準軍人

②前記(ア)～(ウ)に該当する方がその傷病により死亡した場合に、その遺族に対して遺族年金または遺族給与金

③前記(ア)～(ウ)に該当する方がその傷病により昭和16年12月8日以後に死亡した場合に、その遺族に対して弔慰金

④昭和12年7月7日以後に勤務に関連した傷病にかかり、これに

人はこの熱泉でゆてた黒卵石をどろぞろ。一個で七年寿命が伸びる由。(佐藤)

より昭和16年12月8日以後に死亡した文官の遺族に弔慰金

⑤昭和46年の遺族援護法の改正により遺族年金、遺族給与金を受ける権利を取得した戦歿者等の妻および戦歿者の父母等に対しては特別給付金

⑥昭和46年の遺族援護法、恩給法の改正により障害年金、障害一時金、傷病恩給を受ける権利を取得した戦傷病者の妻に対しては特別給付金

⑦昭和47年4月1日までに弔慰金を受け取る権利を取得した戦歿者等の遺族で、昭和40年4月1日から同47年3月31日までの間に公務扶助料、遺族年金などの受給のある方がなくなった場合に特別弔慰金

⑧昭和40年4月2日から昭和47年4月1日までの間に弔慰金だけを受給した方に対しては特別弔慰金

▼請求窓口

①は各都道府県の援護事務担当課

②から⑤までは市役所、区役所、町村役場の援護担当課

▼請求期限

①②③④は昭和54年9月30日

⑤は昭和50年9月30日、⑦⑧は昭和50年5月28日までです

▼不審の方は、まず本会事務局にお問合せ下さい

# 寄付者芳名

(九九名)

今期もまた左に掲げますとおり、多数の有志の方からの御寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

ここに載せました会員の方からは、この外に四十七年までの会費は全部いただいております。中には四十八、四十九年と先々までの分を前納下さっている方も多数ありますことをご申添えます。

環礁を御覧下さってのお喜びのお便りがありました。寄付の御送付によって経済的の御協力をお考え下さる実情に接し、会長はじめ役員一同張り合ひを感じ努力をこらしてつづけております。

(昭和47年6月1日から昭和47年10月31日までに入金の分)

寄附額 芳名(敬称略)  
篤志会員その他

北海遼	五〇〇〇	長谷川 徹 殿	〇群馬県	五〇〇〇	兄 新後閑 彰
二五〇〇	目黒袈裟喜 殿	〇埼玉県	五〇〇〇	弟 斎藤 栄一	
一五〇〇	妹 岩川あい子	〇千葉県	五〇〇〇	弟 山藤 茂	
一〇〇〇	母 金子 きよ	〇千葉県	一〇〇〇〇	妻 杉 富貴	
六〇〇〇	父 北村弥三郎	〇東京都	一五〇〇〇	妻 名児耶アキヨ	
〇宮城県	兄 松浦 広雄	〇東京都	一五〇〇〇	母 池沢 リン	
五〇〇〇	兄 成田松一郎	〇東京都	五〇〇〇	母 石井 ふみ	
〇山形県	三〇〇〇	妻 佐竹 エス	〇広島県	五〇〇〇	長男 山形 雅俊
三〇〇〇	堀米与三郎	〇東京都	五〇〇〇	母 植田 操	
〇福島県	父 佐藤 角治	〇東京都	一五〇〇〇	妻 中山 道源	
五〇〇〇	妻 高林 セキ	〇東京都	五〇〇〇	妻 尾崎ハツミ	
〇新潟県	母 山田 信子	〇東京都	一五〇〇〇	父 植田 道源	
三〇〇〇	姉 鮫島みさを	〇東京都	一五〇〇〇	妻 大野美穂子	
一〇〇〇〇	妻 松岡 イキ	〇神奈川県	一五〇〇〇	妻 森川 チノ	
五〇〇〇	父 茨木 清澄	〇神奈川県	一五〇〇〇	妻 大野美穂子	
〇茨城県	父 島 竜	〇静岡県	一五〇〇〇	妻 橋 半太郎	
一〇〇〇〇	妻 大畑はるゑ	〇静岡県	一五〇〇〇	妻 松野 文治	
〇栃木県	妻 石川 みち	〇静岡県	一五〇〇〇	父 武田 タカ	
一〇〇〇〇	妻 大畑はるゑ	〇静岡県	一五〇〇〇	父 山部 貞	

〇富山県	五〇〇〇	兄 鶴橋市太郎	〇愛媛県	一〇〇〇〇	父 村上忠太郎
五〇〇〇	兄 平野 薫	〇愛媛県	一五〇〇〇	母 小西トミエ	
二〇〇〇	妻 村根 光栄	〇愛媛県	一五〇〇〇	母 奥田 マス	
五〇〇〇	妻 竹林 房江	〇愛媛県	一五〇〇〇	母 香川ムメノ	
〇石川県	妻 柴田外喜子	〇愛媛県	一五〇〇〇	母 横山ヨスエ	
五〇〇〇	兄 林 庄三	〇高知県	五〇〇〇	母 松本ミチル	
〇福井県	弟 田賀佐太郎	〇高知県	五〇〇〇	父 片山 春次	
三〇〇〇	妻 梅田 清子	〇福岡県	五〇〇〇	母 二神トキエ	
五〇〇〇	妻 足立けさ	〇福岡県	二六四五	父 西岡 虎次	
〇長野県	妻 伊藤ますの	〇福岡県	一五〇〇	母 片山カズヨ	
二五〇〇	妻 鎌倉さかよ	〇福岡県	一五〇〇	母 倉員ミカノ	
一五〇〇	妻 鈴木ちあ	〇福岡県	一五〇〇	妻 佐藤タカノ	
五〇〇〇	妻 寺沢喜三代	〇福岡県	一三〇〇	母 江崎 ヒモ	
〇岐阜県	妻 竹中 ニキ	〇福岡県	五〇〇〇	兄 一木 貞利	
一〇〇〇〇	母 八木 きよ	〇佐賀県	二〇〇〇	母 宮崎 トモ	
〇京都府	妻 中野フヂエ	〇佐賀県	五〇〇〇	母 大串 キサ	
一〇〇〇〇	妻 江坂 富子	〇佐賀県	五〇〇〇	母 野瀬チトセ	
〇大阪府	妻 岡本 くま	〇佐賀県	五〇〇〇	母 甲斐 光子	
一〇〇〇〇	妻 清水つちゑ	〇長崎県	二五〇〇	父 杉浦弥一郎	
〇兵庫県	妻 山形 雅俊	〇長崎県	一五〇〇	妻 前田 フサ	
四〇〇〇	妻 江坂 富子	〇長崎県	一五〇〇	妻 森川 チノ	
三〇〇〇	妻 岡本 くま	〇熊本県	一五〇〇	妻 大野美穂子	
〇兵庫県	妻 清水つちゑ	〇熊本県	一五〇〇	妻 橋 半太郎	
七四〇	妻 山形 雅俊	〇熊本県	一五〇〇	妻 松野 文治	
〇広島県	妻 植田 操	〇熊本県	一五〇〇	父 武田 タカ	
五〇〇〇	妻 中山 道源	〇熊本県	一五〇〇	父 山部 貞	
〇山口県	妻 尾崎ハツミ	〇熊本県	一五〇〇	妻 橋 半太郎	
三六〇〇	妻 内富みつゑ	〇大分県	二七五	父 内田政次郎	
一五五〇	妻 内富みつゑ	〇大分県	二七五	父 山部 貞	
〇徳島県	妻 児玉 富子	〇大分県	二七五	父 山部 貞	
一〇〇〇〇	妻 長川 恵	〇鹿児島県	一〇〇〇〇	長女 宮田 東子	
〇香川県	妻 坂本 栄助	〇鹿児島県	一〇〇〇〇	妻 宮田 東子	

1 記録写真 太平洋戦争上  
ロバート・シャロッド 編  
中野 野五郎 郎 編  
光文社 38年4月25日20版発行

2 大本營発表の真相史  
元大本營報道部  
元海軍中佐富永謙吾著  
自由国民社・45年7月1日発行

3 近代の戦争7・太平洋戦争下  
大畑篤四郎著  
人物往来社41年2月10日発行

4 ニミッツの太平洋海戦史  
チエスタ・W・ニミッツ 共著  
E・Bポッター  
実松謙・富永謙吾共訳  
恒文社40・7・25三版発行

5 太平洋戦争 日本陸軍戦記  
文芸春秋臨時増刊46・4号

6 ああ戦場  
太平洋戦争の激戦地をゆく  
別冊週刊読売45年9月号

片山計棟(横浜市)から  
図書御寄贈のご紹介  
本年(昭和47年)7月26日日本会  
に対し左記書籍の御寄贈がありま  
したので誌上厚く御礼申し上げます。  
何れもわれわれの肉親の奮戦  
苦闘の跡を偲ぶ得難い貴重な資料  
です。本会文庫に死蔵するのは勿  
体ない次第です。いつでも御来会  
御覧下さいますよう御紹介いたし  
ます。

### 世界一小さな国から

#### 「日本に航空便を」

「おとぎ話」に鹿児島県が乗り気

赤道直下の太平洋にある人口約七千の小さな国、ナウル共和国が日本に航空機乗入れを希望している。この話に鹿児島県が「採算や利用度」を別にして、まるでおとぎ話みたいな夢がある」と乗り気。運輸省に「誘致」を働きかけている。

同省航空局国際課の話では、同国は六十人乗りのフェローシップ一機を持っていて、島の八割が良質のリン鉱石からなるが、あと三十年すれば底をつくといわれる。「資源が枯れた場合に備え、観光立国をねらっているようで、その布石が航空機乗入れでは……」というものが、国際課の見方。

もつとも、同国までは約五千五百キロ。航統距離が短いフェローシップでは、途中いくつかの島で中継しなければ無理。当然安全性に問題があり、鉱石関係者以外にほとんど人の交流がないまま、はたしてお客があるかどうか。など、問題も残る。また飽和状態の東京、大阪、福岡の各国際空港では受け入れがムリ。

こんな事情を耳にしたのが、この四月、新空港をつくり「国際化」を目ざす鹿児島県。このほど運輸省に真意を確かめた杉浦弘、鹿児島空港長は一運輸省としては問題なく、鹿児島県が最も熱心なので希望が持てる。ただ、ナウル共和国は日曜日に来て月曜日に帰

りたいとの意向で、この点原則として日曜が休みの入国管理事務、税関、検疫の係員さえ確保できれば」といつている。「朝日新聞」(注)ナウル共和国。オセアニア諸島にあり。一七九八年英艦隊が発見。国連信託統治領などを経て六九年(昭和44年)月独立した。面積二十一平方キロ。共和国としては人口、領土とも世界一小さい)

### 事務局だより

#### ○副採用銘石の到着状況

11月15日現在36都道府県から銘石が到着しております。各県世話人の方々の熱心なご協力によって、年内に全国の銘石の御送付が終ると思っておりますので、明年早々会員内海軍三様ご経営の第一石材工業株式会社に移し、製作にかかっていただくことといたします。

#### ○九段会館の宿泊

直会旅行の参加)を希望される方は同封の回答用はがきで、遠慮なくお申込み下さい。毎年宿泊や旅行のお申込みを下さるながら、お知らせなしに、取止めたり、予定変更のため、本会の立替私となり、損失となる場合があります。お申込みと同時に御送金下さいませ、おそくとも一月十日まで本会に入金するよう御協力をお願いいたします。

○直会旅行へ参加を大変むつかしお考えの方が有るようです。気のおけない、楽しい旅行ですからどなたでもご参加下さい。ただしバスで往復する一泊旅行ですから、バスの座席や旅館の部屋の準備などありますので、早目にお申込み下さい。

○戦史叢書御希望者は同封はがきでお申込下さい。③の海軍作戦(2)は一月下旬発行と予定。①と②は御注文あり次第お送りします。注文数が多くと若干割引になります。が、一応定価通り御送金下さい。割引額はわかり次第お返しいたします。

#### ○ルオット墓地写真頒布について

14頁に記載マイロン、ナカタさんのネガはカラー、6.6判20枚ですその中3枚を白黒で14頁のせました。カラー御入用の方は三枚で一五〇円(送料別)でおわけします。20枚全部ですと千円(送料別)。コタツクのネガ、何れも色彩よくとれていきます。

#### ○在米篤志会員郵便宛先

ケニス、エス、ウナウナム氏 夫妻  
Mr. & Mrs. Keith S. Williams  
355 E. Laurel St.  
Oxnard, Calif. 93030, U.S.A

#### ○徳原房、徳子夫妻

Mr. & Mrs. Isamu Tokuhara  
1009 Long Lane, Apt. 301  
Honolulu, Hawaii, 96817

#### 航空便の所要日数

航空便の封筒は VIA AIR MAIL と書く、航空郵便料金はがき 45円  
10グラムまで 90円  
10グラムをこえると 10グラム毎に 80円

航空便の所要日数  
ハワイ 二―三日  
カリフォルニア 五―六日  
クリスマスカード、年賀状の特  
別取扱はありませんので右所要日  
数ご参考の上お出し下さいれば良い  
と思えます。

## 謹賀新年

昭和四十八年元旦

### ◎本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香 鳩彦	篤志会員	大野 克一
顧問	石橋 湛山	篤志会員	嘉村 栄
相談役	古賀織之助	篤志会員	木ノ下 甫
会長	村上 彦一	篤志会員	ケイス・エムス
副会長	浮田 信家	篤志会員	瀬沼 光久
常任幹事	佐藤 宗丕	篤志会員	土屋 太郎
常任幹事	井上 賀雄	篤志会員	徳原 勇
常任幹事	佐竹 エス	篤志会員	同 徳子
幹事	秋山 正清	篤志会員	中島 昌彦
幹事	宇田川ヒサ	篤志会員	中田 虎一
幹事	岡野 正文	篤志会員	成田喜代治
幹事	木村 久子	篤志会員	西村 祐造
幹事	国松ふみ江	篤志会員	長谷川 栄次
幹事	小泉 文江	篤志会員	長谷川 敏
幹事	高橋 鎮夫	篤志会員	林 幸一
幹事	萩原金次郎	篤志会員	藤平 直忠
幹事	橋口 昭利	篤志会員	松平 永芳
幹事	山浦 榮平	篤志会員	村岡 達志
幹事	末広 信子	篤志会員	横溝 幸四郎
監事	大高 正男	篤志会員	安藤 サヨ
監事	有馬 吉郎	篤志会員	白鳥 悦子
篤志会員	成甫 徹	篤志会員	本木 光江

### 環礁 発行所 マーシャル方面遺族会

〒154 東京都世田谷区野沢三―一―三  
電話 四二―一三六―一四  
郵便振替 口座東京 九三四八七  
定価 一部五十円(送料共)  
編集兼発行人 浮田 信家  
印刷所 保好舎印刷株式会社